

## 「平成じゃないか体」宣言

第四回政治がよくなれば、日本は変わる

橋爪大三郎

日本の政治は、よくなるだろうか？

「政治は変わらない。誰が政治家になっても一緒さ。」耳にタコができるほど、聞いてきた言葉だ。戦前から投票を続けてきた老人も、選挙権をまだ得ていない若者も、判で押したようにこう言う。本当にそうだろうか。「政治は変わらない」と、誰かが証明したのだろうか。皆が政治は変わらないと思っているので、その結果、政治が変わらない。そういう関係が成り立っているだけではないのか？ それなら、「政治を変えよう」と皆が思えば、政治が変わるかもしれないではないか？

政治は変わる、と私は思う。

私たちには、政治を変える力がある。政治を通じて、日本の社会を変える力がある。そのことを信じて行動すれば、政治は変わるのである。

政治をよくするにはどうすればいいか。まず、①政治とは何かについて、きちんと理解する。そのうえで、②いままで何が政治を無力にしてきたかを、突きとめる。さらに、③政治をよみがえらせる有効で実行可能な手段を、具体的に提案する。あとはそれをまっしぐらに実行すれば、政治は確実によくなっていくはずだ。

日本の政治がこれまで、およそ輝きのない、いびつに歪み泥にまみれた、くすんだまがい物であったとすれば、それは国民が、政治をその程度のものでしてしか、イメージしてこなかったからだ。政治の本質を突きつめる努力をせず、政治の存在理由とその役割を、はっきりさせてこなかったからだ。政治についての国民の理解が高まり、要求水準が高まれば、政治はそれに応じて、いまよりましなものに変わって行かざるをえない。

そこで、まず最初に片づけておかなければならないのは、政治とは何かという本質論である。めんどろなようでも、この基礎のところをしっかりと考えておかないと、その先がぐらぐらになる。

### 1 政治とは、意思決定である

政治とは何か。私は政治とは、意思決定 (decision making) であると思っている。政治とは要するに、何かを決めることなのである。

もう少し詳しく言おう。政治を成り立たせる要件は、まず、複数の選択肢。いくつかの可能性のなかから一つを選ぶ。これが政治にとって本質的である。第二に、複数の人間。一人で行なう意思決定も、意思決定ではあるけれども、政治とは言わない。二人以上の人間がいて、彼らに共通に関わることとがらを決めてはじめて、政治である。第三に、その決定が拘束力をもつこと。それだからこそ、彼

らは真剣に決定を左右しようとする。——以上が、これ以上簡単にできない政治の構造であると言ってよいだろう。

このように定義するならば、社会のいたるところに政治を見いだすことができる。家族のなかにも、学校のクラスのなかにも、職場にも政治はある。それらは「ミクロな政治」である。

それに対して、いわゆる「政治」は、国家における政治のことである。国家には、国民社会全体を拘束する法律を制定する議会、その執行に責任をもつ政府（内閣や各省庁）といった機関が存在する。（政府は、法案や予算案を提出することができるので、実際には大きな政治的権限を持っている。）もっとも大きなサイズの社会（国民社会）で、国家的な選択肢を決定するのが、狭い意味での政治（「マクロな政治」）なのだ。

近代の政治制度（いわゆる議会制民主主義）では、意思決定は二重になっている。すなわち、実際に法律や予算を決定するのは議会であるが、議会を構成する議員を選挙するのは、一般の有権者である。議員は政党に属し、政策を掲げて選挙を戦う。有権者の意思は選挙を通じて間接的に、議会の意思決定に反映する。間接的ではあっても、有権者がこれらの決定を下しているのに違いない、と考えるのである。

◆ 一般に、複数の人間が集まってどのように決定を下すかは、むずかしい問題である。何人もが集まれば、意見が違っているのがふつうであり（もしも、いつでも意見が一致しているのなら、そもそも政治は必要ない）、その対立を解消するうまい方法があらかじめ与えられているわけではない。意見を集約するやり方にもいろいろあり、やり方が違えば、結論も当然違ってくる。

議会制民主主義は、この問題をつぎのように処理する。まず、多数決。なにかを決定する場合には、投票をして、多数をえたものが結論になる（多数決）。つぎに、政治制度そのものを、選択の対象に

する。投票のやり方にもいろいろあるのだが、どういうやり方にするかということ自体を、投票によって決定するのである。よく考えると、ぐるぐる回りのようで何となく変なのだが、民主主義を徹底するところならざるをえない。

選挙制度はだから、議会政治にとって、とても大切である。議会では、議員が投票でものごとを決める。その投票をする、肝腎の議員を選ぶのが、選挙だ。選挙制度が違えば、当選する議員の顔ぶれも違ってくるから、議会での投票結果も違ったものになる。選挙制度は、政治を根本的に左右するのだ。

◆ 戦後ずっと続いてきた中選挙区制が、小選挙区制に変わった。これは、とても大きな変化だ。選挙制度の変り目は、政治が変化する絶好のタイミングでもある。この機会を見逃すべきではないだろう。小選挙区制と言っても、全部の議員をそこから選ぶのではない。三百の小選挙区から、ひとりずつ議員を選び、残りの二〇〇議席を、比例区から選ぶ。小選挙区では勝ち目のない社会党（改め社会民主党）や共産党や自民党の古参議員が必死で反対するといけないので、指定席の議席を与えて改革に反対しないように根回しをした妥協の産物である。

いまの国会議員は、選挙法が変わるまえの中選挙区から選ばれた最後の議員である。今度、解散↓総選挙があれば、彼らに代わって、小選挙区から選ばれた議員が議会を構成することになる。かりにあまり顔ぶれが変わらなくても、議会の性質が変化する。名実ともに、小選挙区制のもとの議会が出来あがるのだ。

## 2 政治とは、究極の選択である

政治は意思決定である。可能な選択肢のなかから、あれかこれか、ひとつを選ぶ。言ってみれば、

究極の選択である。

双方の顔を立て、足して二で割るのが癖になっている日本人には、なかなかこのふん切りがつかない。選択をして、間違ったらどうする？ 責任を問われ、追及される。それぐらいなら、なにも選択しないほうがまだ。そこで、なるべくものごとを決めないようにする。責任をとるのが嫌なのである。こういう体質がしみついていっていると、政治を軽蔑するようになる。自分が政治に関わりたくないだけでなく、誰かが政治に関わっていると、政治を軽蔑するようになる。自分が政治に関わりたくないだけとが嫌がることをやっている以上、たんまり袖の下を受け取っているに違いないというわけだ。

誰もが政治を軽蔑するならば、政治は未熟になる。そして、ほんとうに政治が必要なときに、しつべ返しを喰らう。ずるずると引きずられるようにして、戦争の深みにはまった半世紀前の東アジア戦争。明確なコンセプトもリーダーも欠いたまま迷走し続けた戦後の日本。アメリカに甘やかしてもらったおかげで、金だけは儲かったが、国際的には少しも信頼も尊敬もされていない。むしろ、面と向かっては言わないが、内心軽蔑されている。そういう情けない扱いを受けるのも、日本の政治が未熟だからだ。

◆ 日本人が政治が苦手なのは、長いあいだ政治を禁じられてきた歴史があるからだ。

秀吉は刀狩りで、農民から武器を取り上げた。「徳川の平和」は、人びとが、身分や土地の境界を乗り越えて、自由に行き来することを禁じた。仏教は、布教や集会といった宗教活動を禁じられ、葬式だけしかできなくなった。武士以外の人びとは政治に関与することを禁じられ、武士は藩主の、藩主は幕府の意に逆らうことを禁じられた。彼らの前に選択肢が複数与えられて、どちらでも自由に選べるなど、考えられないことだった。

明治になってからも、多くの人びとにとって、政治は手の届かないものだった。初めの二〇年近くは議会も憲法もなかったし、そのあとも、税金を沢山納めなければ選挙権がえられなかった。やっとならなかつた。戦勝国・アメリカが日本を占領し、独立後も冷戦の枠に日本を縛りつけた。日本には、対米協調・自由経済の道しかなかった。この現実を甘受した自民党と、拒否した社会党とが、国会で対立の儀式を繰り返した。社会党は現実を汚れたものとみ、それと無縁であることを証明する（責任を取らないですませる）ために、自民党と相談づくで乱闘を演じたりもした。それが、戦後半世紀近く続いた「五五年度体制」だった。

◆ これだけ長い間、政治と絶縁された環境に置かれていると、日本人全体が政治センスを失ってくる。

GLASS&ART  
No.13 グラス&アート



バーティル・ヴァリオン  
「HEAD」 1995

●特集  
スウェーデンの  
現代ガラス  
素材の美、デザインの美

●インタビュー  
結城美栄子 (陶芸家・女優)

アンティークのある暮らし

ステンドグラスの本  
話題のガラス展  
全国的美術、工芸展  
3月27日発売 定価1,700円

(株)栄光 グラス&アート販売部  
〒102 東京都千代田区二番町12-13 BDA  
二番町ビル3F  
Tel. 03-3222-5015 Fax. 03-3238-9598

日本で政治と言えば、根回しかちよつとした腹芸のことであり、存在を賭けての攻防ではない。このことは、中国と比較してみるとわかる。

中国では、政治こそがすべてである。政治の出発点は、はっきりした利害感覚をもつことだ。自分の利害、他者の利害が正確に認識でき（かつ、それが対立・矛盾することがわかっ）てはじめて、政治がスタートする。中国人は、コネクションを大事にするけれど、根本のところでは、自分の利害をわきまえた個人主義者である。この点、西欧世界の人びとと共通する部分がある。

いっぽう、日本人は、集団帰属を大切にす。すべての出発点は、自分がどういう集団に属しているかである。わが社と競争相手、自省庁と他省庁の対立には敏感だけれども、自分の利害は意識しない。日本人の場合、まず集団を選択してしまっている。そこで、それ以上に自分が何を選択すべきかとは考えない。これでは政治はできっこない。自分の帰属する集団の興亡と、運命を共にするしかない。だから日本人は、一家心中や玉碎に追い込まれるのである。

### 3 小選挙区選挙で、政治はよみがえるのか？

日本の政治の分岐点は、田中派が登場したことだった。

戦前からの中選挙区制でスタートした戦後民主主義は、一九五五年に自由党と民主党が合体した結果（保守合同→五五年体制の確立）、自民党の単独長期政権に落ち着いた。社会党は、国会に議席を占めてはいても、政治に関わるのが実質的にできなくなった。中選挙区制のおかげで、自民党の議員は、選挙に失敗しなければ（つまり、後援会に資金をつぎこんでうまく回転させれば）連続当選が保証された。選挙は、政策の争いではなく、複数の自民党議員のうち、誰が貧乏クジをひくかの争いになった。

中選挙区を舞台に、派閥が政治の単位となった。派閥は、後援会にはらまく政治資金をかき集め、大臣ポストを分捕るのに必要だった。派閥が連合して自民党内で多数を占めれば、自動的に政権を獲得することができた。派閥・対・派閥の力学が、政治のすべてになった。国民は、それを見てもますます政治に対する関心を失っていく。

田中派は、派閥のなかでも特別だった。学歴なしで叩きあげた田中角栄氏の特異なキャラクター。金脈疑惑で首相を辞め、ロッキード裁判を抱えたという事情もあって、田中氏は、自派の議員を沢山当選させ、数の力で自民党を支配することを至上命令にした。この結果、党中央のような巨大派閥ができあがった。そのリーダーである田中氏や、田中派を引き継いだ竹下・金丸・小沢氏は、キング・メーカーとして大きな権力をふるった。

巨大派閥の登場は、中選挙区制→自民党の単独長期政権↓……の必然的結果である。しかし、派閥が巨大になると言っても、そのサイズには（ひとつの選挙区から二人を立候補させでもしないと）限界がある。そこで、ほかの派閥と結んで支配下に置き、それを陰でコントロールする海部政権みたいなやり方になる。この権力の「二重構造」によって、政治はますます不透明になった。

こうしたさまざまな矛盾のなかで、日本の政治はほとんど窒息寸前である。政権の中枢にいた人びとがいちばん、そう思った。金丸氏がスキャンダルで失脚した混乱のなか、竹下派を割って、小沢一郎、羽田孜氏が自民党を飛び出した。その根本の動機は、そこにある。その結果、歴史的役割を終えた五五年体制がようやく崩壊して、連立時代がスタートしたわけだが、その功績は、彼らに加え、前年に日本新党を旗揚げし連立政権の環境を整えた細川護熙氏に帰すべきだろう。

改革をスローガンに掲げた細川政権は、小選挙区制を柱とする選挙制度改革に全力をあげた。この

制度改革の目的は、選挙による政権交替の実現である。有権者の意思が政治に反映する——そのもっとも分かりやすいかたちが、政権交替であろう。選挙結果のいかんで与野党が入れ替わり、新しい政策が採用される。こういう民主主義の基本中の基本であるメカニズムが、戦後の日本ではたったの一度もはたらかなかった。政治を人びとの手に取り戻し、政治の力で日本をつくり変えていくために、選挙制度改革はどうしても通り抜けなければならない関門だった。

小選挙区制がうまく機能して、日本の政治はいまよりましなものになるだろうか？ そう信じたいが、それは保証のかぎりではない。はっきりしているのは、とにかくいままでのままではだめだ、ということだ。小選挙区選挙で、日本をよみがえらせることができると思はれる。小選挙区制とは何か、それをうまく運営するにはどうしたらいいかを、みっちり考えてみよう。

#### 4 小選挙区選挙は、どこがいいのか？

ところで中選挙区制でも、選挙結果で政権が交替する点は、小選挙区と同じではないかと疑問に思うかもしれない。

なるほど、いちおうそうである。でもそれは、A、Bの二大政党が、政策をかかげて正面から激突した場合の話。Cという第三党が混じっていると、A、B、Cの議席が3・3・1などとなり、C党がキャスティング・ボートを握ってしまう。A、Bのどちらが政権を握るかも、C党の思うがまま。C党が寝返っただけで、いとも簡単に政権交替が起こることになる。C党の協力をうるために、A党もB党も思い通りの政策を実行できない。

A党を自民党、B党を新進党、C党を社民党（この1月、社会党は社会民主党に名前を変えた！）と置き換えてみれば、まさにいまの国会そのまま。国民にはなんの相談もなしに、政権交替が起こったり、首相が社会党から自民党に代わったりする。連立政権は、中選挙区選挙の政治システムが壊れて小選挙区制度に移行するまでのあいだの、過渡的な現象なのだ。

小選挙区制度の問題点は、死票が多い、ということになっている。これはむしろ、長所だと思う。

そもそも「死票」（なんとという言葉だろう！）とは何か？ 議席と結びつかない票、次点候補や次々点候補に投じられた票のことだ。だが、よく考えてみよう。こういう票がなければ、そして落選する候補がいなければ、選挙は成り立たないのである。全員当選＝死票ゼロの選挙ぐらい、意味のない、おぞましい選挙はない。「死票」という名前をつけたひとは、政治とは何かがわかっていないのだ。

政治は「究極の選択」だったことを思い出してほしい。どちらにしようかと誰もが迷うくらい、魅力的で実力のある候補が二人いる。どちらにしようかと悩むくらい、整合的で実行可能な政策が二つある。そういう選択肢が二つそろってはじめて、政治は内容が豊かになる。次点の候補の得票が、当

KINEJUN

もっと映画と遊びたい！

# キネマ旬報

キネマ旬報は最新映画情報満載で毎月5日、20日、発売です。



キネマ旬報社

〒112 東京都文京区小石川111-21-14  
TEL 03(3815)7131 FAX 03(3815)7140

選した候補の票に近ければ近いほど、つまり死票の割合が高いほど、その選択は価値があったことになるのだ。自分の投票した候補が当選しないと気がすまないというのは、単なる子供じみた感情にすぎず、民主主義の精神と関係がない。死票をじつと我慢するところに、民主主義が育つのである。

比例代表制度の利点は、民意(有権者の支持政党の割合)を正確に議席に反映するところだという。(ちなみに、中選挙区制度は、比例代表制と近い性質をもっている。)

これはむしろ、欠点である。

その理由は、ここまでの説明で、もうわかるだろう。政治にとって重要なことは、多数者の意思に従って、ある政策を実行に移すことである。なぜ多数者の意思に従うかと言えば、少数者の意思に従うよりもまだからである。(よく考えてほしい。ある政策を実現するのに、それよりうまい方法があるだろうか?)ある政策を実現するには、同じ考えをもつ人びと(つまり政党)が議会で多数を占め、政府を構成したり、法案や予算を通したりすることが必要になる。「民意を正確に議席に反映」したりすれば、それがやりにくい。議会で多数を構成するのがむずかしいからである。A、B、Cの三党で政策調整をしなければならなかったとしよう。これはまるで、ゴッホとピカソとセザンヌが、三人で一枚の絵を描いてくれと頼まれるみたいに、おろかなことなのだ。三人に一枚ずつ絵を描かせて、どれがいちばんいいかを決める。このほうがよほど、すっきりしている。政治も同じことなのだ。

多数意見が重要なことはわかった。それでは、少数意見は無視されるのだろうか?

少数意見を尊重する。民主主義の基本である。でもそれは、少数意見も少しは取り入れよう、という意味ではない。そんなことをすれば、せつかくの政治的決定がガタガタになってしまう。政策はあ

くまで、多数意見にもとづいて行なう。少数意見は、多数意見が間違っていたときのための、安全弁なのだ。いろいろな意見があったことをしっかり記録して、いざという場合に、もうひとつのやり方で切り抜ける。そのときのために、少数意見は尊重されるのである。

そのためにも、徹底した討論が必要である。人びとはさまざまな意見を持っている。そしてそもそも、どの意見が多数、どの意見が少数、とはじめから決まっているわけではない。討論のなかから、だんだんに決まってくるのである。候補者のなかから誰に投票するかを選ぶ、法案のなかからどれに賛成するかを選ぶ。そのプロセスで、どれだけしっかりとした討論ができるかで、民主主義の成熟度ははかることができる。結果的に少数となった意見も、討論を通じて相手に影響を与えることができるし、記録を残すことができる。そういう意見が存在した事実を忘れない——それが、少数意見を尊重するということなのである。

小選挙区選挙の利点は、討論を通じてコンセンサス(多数意見)を形成し、意思決定や政策の実行

季刊インターコミュニケーション  
新しいコミュニケーション文化を  
創造するヴィジュアル・ジャーナル  
A journal exploring the frontiers of art and technology  
全国書店にて2月27日発売予定

# 16

1996 Spring No.16

## 特集

### エンターテインメントテクノロジー

大原伸一×月尾嘉男×武蔵光裕  
「21世紀のエンターテインメントデザイン」

大月浩子×森塚裕×森岡祥倫  
「エデュテインメントのテクノロジー」

伊藤俊治  
「分身のための野郎  
荒川修作×マドリオン・ギンズ  
(鉄巻天狗反転地)」

上野隆哉  
「テクノ・オリエンタリズムと  
ジャパニメーション」

生井英孝 / 大口孝之 /  
香山リカ / 志賀隆生 他

InterCity  
光州ヒエンナーレ  
リヨン現代美術ヒエンナーレ  
シエームズ・タレル展+  
田中隆博展 他

InterDialogue  
荒川修作×磯崎新

インターネットコミュニケーション  
WWW版 URL  
[http://www.ntticc.or.jp/pub/ic\\_home\\_1.html](http://www.ntticc.or.jp/pub/ic_home_1.html)

NTT出版株式会社  
●営業 | 〒153 東京都目黒区  
下目黒1-8-1 アルコタワー 11F  
Tel.03-5434-1010 Fax.03-5434-9200  
●編集 | 〒102 東京都千代田区  
六番町6-28 丸全量町ビル 3F  
Tel.03-3288-1130 Fax.03-3288-1129

を行なうのに適している、という点である。

念のため、コンセンサスについて注意しておこう。それは、少数意見もなるべく取り入れ、「足して二で割る」式に、玉虫色でよくわけのわからないものを作り出すことではない。そうではなくて、討論のなかで対立軸をしいにはっきりさせていき、議論が平行線となったところで人びとが「究極の選択」を行なって、結果的に多数の支持をうる意見を作り出すことである。結果的に少数となる反対意見が存在しなければ、それはコンセンサスとは言わないのだ。

#### 5 小選挙区選挙をもっと楽しくする、三つの方法

##### —— 比例区廃止/次点競争制/予備選挙 ——

このように考えてみると、いまの小選挙区制度には、まだまだ欠陥がある。

まず、比例区なんかなくていい。

小選挙区と比例区という、水と油みたいなものを抱き合わせにしたのが、いまの制度である。比例区がなければ、これまで20〜50議席を確保していた共産党の議席がゼロになってしまいそうだし、上州戦争みたいに同じ地盤でしごきを削ってきた大物議員のどちらかを公認するまで、大もめにもめてしまう。そこで比例区II指定席をつくって、収まってもらうことにした。比例区は過渡的な制度だから、何回か選挙が済んだところで、廃止するのが本当である。国会議員の数も減って、ちょうどよい。

比例区を残しておく、小選挙区で激突するA、B二大政党のどちらも過半数を得られず、比例区で生き残ったミニ政党Cがキャスティング・ボートを握る、というかたちになりやすい。これでは何のために、小選挙区制にしたのかわからない。さいわい共産党は、自民党にも新進党にも協力しない。そうなので、実害はないけれども、問題はどちらにも協力した実績のある社民党(旧社会党)である。

民主主義の発展のため、比例区は廃止し、社民党にはお引き取りをねがうしかない。

小選挙区制は、多数意見が議席の大部分を占める制度なので、下手をするとつぎの選挙までに、少数意見が死に絶えてしまう可能性がある。臥薪嘗胆、少数意見が選挙区でしぶとく生き残っていてもならないと、この制度はうまくいかない。

少数意見を国会の議席に反映させるなら、比例代表である。せっかく参議院があるのだから、参院選挙の方法をこれに近づけるべきだろう。いまの参院の地方区は、事実上小選挙区みたいなところが多く、参議院の政党化が進んでしまった。参議院に、衆議院のチェック機能を期待するなら、参議院の選挙方法を、衆議院と別なものにしておかないとだめである。さもないと、似たような議席の配分になって、衆議院を通過した法案はみな参議院も通ってしまう。また比例代表と言っても、拘束名簿方式だと、政党支配を強めるだけなので、個人に投票できる方法を工夫したほうがいい。

参議院はこれでいいとして、いちばん大事な衆議院で、少数意見を確保するうまい方法はないもの

面白くて、ためになる！  
大好評「アートコミック」シリーズ  
第2弾！

# まんが 日本美術史

全3巻、同時発売！  
辻惟雄監修  
菊判(25×15cm)総各228頁  
定価各1,800円(税込み)

まんが日本美術史  
原典…平安時代の美術  
原典…江戸時代の美術  
原典…現代の美術

第1巻 鎌倉時代  
第2巻 室町時代  
第3巻 江戸時代

三内丸山遺跡や吉野ヶ里集落の発掘は、古代史愛好家に少なからぬ興奮を与えました。最新の美術史研究の成果を大胆にとり入れて、これまでの美術史に欠けていた想像力あふれる記述に心がけ、歴史上の人物たちをいきいきと蘇らせます。好評の既刊「まんが西洋美術史」の姉妹編！

●アートコミック里中浦智子「アフアエロ」5月刊行予定!!

美術出版社  
TEL 03(3234)2151  
FAX 03(3234)9451

か？

ある。次点歳費制である。

この方法は、私が考えついたもので、少し説明が必要だと思う。

小選挙区選挙では、甲乙つけがたい二人の候補が競り合って、ぎりぎりのところで当選が決まるのがいい、とのべた。次点の候補も、議員にふさわしいすぐれた人材である。いざとなれば、すぐにとって代われるように、選挙区での政治活動を保障し、つぎの選挙にも立候補してもらう必要がある。そこで次点の候補にも、歳費（議員としての給与）を与えることにし、それ以外にもなるべく政治家にふさわしい待遇を与える。つぎの選挙で、現職が有利になりすぎないためだ。

そんな面倒なことをするぐらいなら、最初から二人とも当選させればいいではないか、と思うかもしれない。でも、それではなんにもならない。片方しか議席がえられないところがミソなのである。

次点の候補は、地元のTVの討論会などで、現職議員と互角に渡り合うことができるけれども、議席がないので、国会で投票できない。意見としては対等だが、権力としては1と0。そこをはっきりさせておくと、小選挙区選挙はきつと面白くなると思う。

落選したのでがっかりして、引退してしまう次点候補がいたらどうするか、この制度の運用にはいくつか考えておかなければならない点もある。引退のケースで言えば、次回の立候補をかけて、早々と予備選を行なえばよい。そして、選ばれた立候補予定者に、歳費を支給したらどうだろう。ほかのケースも工夫次第で、きつとうまくやり方がみつかるはずだ。

話が予備選挙になった。三番目に、衆院・小選挙区の立候補予定者を、予備選で決めることを提案したい。

予備選（プライマリ）という考え方は、これまで日本の選挙民になじみが薄かった。しかし、小選挙区選挙は、本番の選挙になると選択の幅が限られてくる（有力な候補者が二人しかない）から、その前の段階で、なるべく多くの選択肢（候補者）をふるいにかけておこうという発想があつてよい。小選挙区の立候補予定者に限らず、政党の役職者もみな、選挙で選んだほうがいい。こうした党内民主主義のシステムを整えていくことは、民主主義の成熟にとって重要である。

新進党がさきごろ党首を、千円払えば誰でも投票に参加できるというシステムで公選して、話題をよんだ。子供っぽいやり方にみえたらしく、からかう論調もあつたようだが、私はそうは思わない。考え方としては、これまで行なわれたどんな党首選よりもまともだと思う。

数年前、私はある雑誌のなかで、「党员チケット制」を提案した。千円を払えば、体育館などで開かれる政党パーティーに誰でも参加でき、立候補予定者を選ぶ予備選挙の投票ができる。支持者の拡大と、選挙資金集めが同時にできるよい仕組みだ、という提案である。新進党の党首選挙の発想は、それと似ているところがよい。

問題があつたとすればどこかというところ、新進党の主導権を争う小沢氏、羽田氏の一騎打ちとなつて、単なる票集めの争いになつてしまったこと。本当か嘘かしらないが、創価学会の組織票が動いて、選挙の結果を左右したと信じた人びとも多かった。新進党の党首といえば、さしづめアメリカなら民主党か共和党の大統領候補にあたる。その選挙なら、今後四年間の政策を掲げた真剣な論争があるべきだった。それには、全国一度に投票しないで、ニューハンプシャー州の予備選みたいに、どこか典型的な選挙区（たとえばP市）を選び、そこでまずひと足さきに投票したらよかつたろう。創価学会があまり強くなく、新進党の支持母体も両候補に等距離であるような中小都市を、P市に選ぶ。両候補はP市に繰り返し足を運び、政策を市民に訴える。マスコミもP市に注目する。有権者の意識は高ま

って、投票率も高くなり、まじめな投票が期待できるだろう。そのあとは別なQ市、……と予備選を何回かやって、最後に今回みたいな全国規模の投票を行なえば、もっと議論が深まったはずだ。

ただ、政治の主導権を有権者に取り戻すためには、党首選よりも、小選挙区の立候補予定者を決めるのに予備選を導入するのがもつと大事である。

「有権者が自分の手で代表を選ぶ」のが、代議制の原点であろう。それなら、候補者の顔ぶれが決まっただけから誰に投票するかを決めるのでなく、候補者を選ぶプロセスにも有権者が関与すべきだ。特に、実際の投票日には二者択一になる小選挙区選挙の場合、こういう工夫をしないと政治が死んでしまう。予備選挙のいいところは、候補者の候補者を大勢探し出し、彼らのなかからもつとふさわしい候補者を選びだすことができること。有能な官僚や政治家の卵みたいな人びとをスカウトしてやることもできる。昔、北海道の横路知事をつぎ出した「勝手連」みたいなやり方もできる。予備選は、公職選挙法の枠にとられないから、現職を辞めなくてもいいのだ。ある地域の予備選で一位となった、大勢の有権者が投票しているとなれば、本人も重い腰を上げるかもしれない。予備選をすると、創価学会や地域団体など、支持組織の対立が露骨になるだけだと心配するひともいるが、むしろそういう力学が明らかになったほうが、候補者が最終的にどういう調整や妥協をしなければならぬかがはっきりしてよい。

もうひとつ、予備選でうまいのは、同時に選挙資金も集まってしまうこと。自民党の伝統的な政治システムは、政治資金を上(候補者)から下(有権者)にばらまく、というものだった。これは、買収という意味ではないが、有権者が費用を負担しなにかぎり、候補者が負担することになる。そして、選挙に金がかかるのは当たり前のことである。東京と選挙区に事務所を構え、秘書や政策スタッフを

雇い、ポスターを貼り、選挙区の有権者に手紙を出し電話をかければ、一年あたり数億円は必要だろう。それは有権者が出すべきなのだ。上↓下でなく、金の流れを逆向き、下↑上にする。政治資金の心配をしなくてもよいのなら、政治家になってもいいというひとはもつと大勢いるはずだ。

具体的にはどうするかと言えば、予備選のパーティ入場券(投票券を兼ねる)を、千円で売りさばく。上限が一人千円なので、資金を集めようとすると、大勢に声をかけないといけない。これが選挙運動をかねる。公民館みたいなところを安く借りれば、売上げはまるまる選挙資金にできるだろう。

こういう会合を、あっちでもこっちでも開いて、地域の有権者からまんべんなく資金を集めることが必要だ。こういう活動は手弁当なので、時間がかかる。主婦や自営業者や老人といった、地域に密着して暮らす人びとが、党支部の活動の主役となることが望まれる。

反対党の大物議員と一騎打ち、なんていう選挙区には、若手の新人を連れてくる。負けてもともと、捨身の戦いで政策論争を挑み、それなりの票を獲得すれば、落選しても政治的には大勝利。つぎは有利な選挙区に変わることでもできよう。そういう知恵を出すのも、選挙区の党支部の役割だ。

きみに喰われて、きみの血肉になって  
続いてゆくのが、僕の愛かもしれない……

## 誰がこまどり殺したの

篠原一

文学界新人賞受賞作「環音KALON」  
に続く、待望の第2作。 ●1200円

1996 Quarterly the  
**文藝 BUNGEI**

文藝賞 春季号

特集 子どもと本の世界 ●1000円

ブックガイド・幼年時代を読む  
金井美恵子／石井桃子／長野まゆみ他  
〔新連載〕 俵万智の翻訳「みだれ髪」  
〔新連載〕 三田誠広／山本昌代／三浦俊彦  
〔小特集〕 原理主義はどこへ行くのか?  
〔追憶〕 ジル・ドウルーズ

河出書房新社  
東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2  
〒151 Tel.03-3404-1201

戦後半世紀、日本の政治は保守／革新、自民／社会の対立で明け暮れてきた。いま小選挙区選挙をひかえて、ポスト五五年体制にふさわしいのは、従来の保守にかわるどのような新しい対立軸かと、あれこれ議論されている。保守二党に拮抗する第三の勢力となることをめざす、社民リベラルの構想もあった。自民党と新進党（の一部）が手を結ぶ、保保連合を模索する動きもあった。社会党は社民党に看板を掛けかえたが、さきがけとの合体問題を含め、先行き不透明である。

政界の現状は、混沌としている。

◆ なにかある対立軸にそってでなければ、政党が作れないという発想が、もう時代遅れであると私は思う。

政党は、政権交替のための仕組みだから、二つあれば必要かつ十分だろう。それは、宝塚の月組／星組みたいなもの（イデオロギー抜きに、人びとをグループ分けしたもの）でかまわないのである。もちろんそこは政治のことだから、自民＋社民（守旧）vs 新進（改革）みたいな色合いの違いはあってよい。でも、自民党にも改革志向の政治家は大勢いるし、新進党にも守旧派の政治家はごろごろしている。要は、政党間の違いよりも、党内の個々の政治家の違いのほうが大きいこと。これがいまや実態であり、これを前提に政党を形成したほうがいいだろう。

最も避けなければならないのは、保保連合である。考え方が近いから一緒にいる、のでは小選挙区制にした意味がない。考え方が近いからこそ別々の政党であることが大切で、さもないと政権交替が起こりにくくなる。いっぽう、議員の鞍替えは歓迎すべきことだ。宝塚でもトップスターが組を変わることがある。アメリカでもしばしば、民主党から共和党への鞍替えが相継いだ。考え方が近い以

上、そうした引き抜きはあっていい。

◆ 政党は、政策を掲げて選挙を戦う。支持をえた政策は、公約（国民との約束）であるから、実行しなければならぬ。政党の公認候補として当選した議員は、政権を支え、その政策を実現する責任を負う。

けれども、政治家の仕事はそれだけではない。任期中に、選挙のときには予想もつかなかったような問題が持ち上がるだろう。それにも適切に対応していくことを、有権者は期待している。つまり、彼（女）の政治的能力を信頼して、政治を任せているのである。

◆ とすれば、政治家への人格的な信頼、政治家個人の政治的信念に対する尊敬が、候補者の選択に際して重要になる。議員は、公約と無関係な政治的決定をする場合には、政党の枠と無関係に判断できるとし、判断すべきである。小選挙区・二大政党制のもとでは、「党議拘束」と称して所属議員の政治的判断（投票）を縛るようなことは、すべきでない。議員は、選挙区の有権者に支えられていることを信じ、勇気をもって行動すべきだろう。そうすれば、野党であろうと少数党であろうと、与野党の多くの議員の協力をえて、法案を提出し通過させることができる。

◆ 同じ政党のなかに、ゴチゴチの守旧派もいれば、ラディカルな改革派もいる。これが二大政党制だ。それなら社民党は、さっさと解党して二大政党に合流すべきだ。大部分は、体質の似通った自民党に。残りは新進党に。それではじめて、両党の政策にそれぞれ幅がでてる。そうでないと、戦後半世紀の社会党の政治的遺産は、このまま雲散霧消してしまおうだろう。

社民党が消えてなくなる（二大政党の一部に発展的に解消する）ことができれば、今回の選挙制度

改革はいちおう成功したことになる。

7 党改革をやりぬけば、日本の政治はよくなる

このように考えてくると、新たな疑問も生まれるだろう。政党の考え方がそこまで似通ってしまうと、いったい何を争点に選挙を戦えばよいのか？

ここで野党の役割が重要になる。

野党とは何か。この前の選挙で、国民の支持をえられなかった政党が野党である。政策を修正し、いつそう時代の要求に合ったものに改めていくのは、だから当然、野党の責任だ。政権を担当していないからこそ、大胆に従来の政策を転換することができる。党内の人事を一新し、世代交替と若返りをはかり、つぎの選挙に全力で挑戦することができる。そういう果敢で積極的な役割が、野党の役割なのだ。そうした姿勢をつらぬけば、必ず近い将来、国民の信頼をかちえて政権党に返り咲くことができるに違いない。

たえざる党内改革、自己点検。これからの政党に課せられるのはこれである。選挙区の有権者が、きびしい監視の目を怠らなければ、これは可能だ。

◆ そのためにも、徹底した党内民主主義が必要だ。

党の政治資金の流れを、すべてガラス張りにする。有能な新人を、つぎつぎリクルートする。現職といえども、予備選で有権者の支持をえられなければ、(少なくともその選挙区では)公認を与えない。そういった厳しい姿勢が必要だ。党の運営・政策・組織を、有権者の意思のうえに組み立てる。これを、これからの日本の政治の基本フォーマットにしたい。

小沢一郎氏は保守二党論にもとづいて行動を起こし、ポスト五五年体制に道を開いた。しかし氏のやり方は、たぶん、自民党時代の派閥政治の手法をひきずっている。この先党改革を進めるためには、政治手法そのものを改革していく必要がある。政治改革は、つぎの世代の手に引き継がれようとしている。これからの二十年が、日本の政治が再生するかどうかの正念場になるだろう。

◆ 政治を改革するには、新しい理想に燃えたリーダーが必要だ。

私の職場、東京工業大学では、社会のネオ・リーダーを養成するために、平成八年四月から、新しい大学院(社会理工学研究科)の新専攻(価値システム専攻略称VALDES)を発足させる。この専攻は、基礎トレーニングに数学と哲学を課し、ディスカッション・プログラムなど実践的なカリキュラムを擁する。先端科学にも人文学にも、社会科学にも明るい、新しいタイプの人材を育てるためのコースだ。今世紀中に、一人と言わず、数人の首相を出そう——これが、スタッフの合言葉である。(入試など詳しいことは、☎〇三―五七三―四一三二―五九・山田までお尋ねください。)

私たちがその気になれば、政治は変わる。政治が変われば、日本は変えられる。自分たちの手に、政治を取り戻すこと。遅すぎたけれども、日本人もそろそろ変わっていいころなのだ。あなたはそう思いませんか？

橋爪大三郎 1948年生まれ。東京工業大学教授。著書に「言語ゲームと社会理論」をはじめ「構造主義」「性愛論」「橋爪大三郎コンクッション―身体論」「性空間論」「山制度論」「大問題―橋爪大三郎の社会学講義」。